

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380419

研究課題名(和文) 近世日本における災害甘受型防災機構の社会経済史的研究 - 信濃川流域を事例として -

研究課題名(英文) Governance System of Flood Control in Tokugawa Japan: as the case study of local society along the Shinano-River

研究代表者

長谷部 弘 (Hasebe, Hiroshi)

東北大学・経済学研究科(研究院)・教授

研究者番号：50164835

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本最長の河川である信濃川とその沿岸地域における近世期の治水と水害対処の制度と組織の実態を、災害甘受型村落社会組織として、社会経済史的に明らかにした。結果として、特に上流域(千曲川沿岸：上田市)と下流域(新潟市)の治水と水害対策を担った村落的共同組織について明らかにしえた。急勾配の水流域である上流域では水害が短期収束型だったために直接の水害当事者による治水と水害対策が行われた。それに対し、低勾配の水流域である下流域では水害が長期滞留型をとったため、水害治水と排水の組み合わせによる複雑なシステムが必要とされ、結果として多くの藩領に渡る村組と調整組織が治水と水害対策にあたったのである。

研究成果の概要(英文)：The Shinano River is the largest river in Japan, with branching streams in the upper streams. The form of flooding differs greatly between the upper and lower stream. The upper stream, in the Ueda region, is the typical river which the 'short-term match' flood occurs. Therefore the peasant farmers' flood countermeasures were taken by the concerned in the Tokugawa Era. The lower stream, in the Echigo Kanbara region, is completely different from the upper stream. The floods that occurred in this area formed rather slowly, and lasted for several ten days. Therefore, the flood control efforts were devoted in the construction of facilities to drain the accumulated waters called 'bad water' and as expected, irrigation facilities for the utilisation of water had to be constructed simultaneously to the drainage facilities. The flood control system was complicated and consisted of many village communities (Mura-Gumi).

研究分野：日本経済史

キーワード：治水 共同性 村落 上塩尻 信濃川 千曲川 村組 水害対策

1. 研究開始当初の背景

歴史的な災害をめぐる人々の思想と対応の仕方が近代と前近代社会で大きく異なっていること自体は、従来の災害史研究の中で指摘されてきたことであつたが内容理解については多様であり、特に村落レベルの資料調査に基づく研究は少なかった。

特に徳川時代の日本社会に特有の洪水対策の考え方、すなわち、地域に居住し生活する者達が自らの手で堤・井溝・川除普請等を行い、その直撃を防ぎ、しのぐべきものであるという考え方や、一定以上の被害は「甘受」すべきものとして許容し、被害を最小限にする工夫をしながら地域的に対処しようとする考え方は、「満水」という景観主義的呼称や、洪水に対する水の管理を「防水」という環境共生的呼称、洪水を管理する不連続堤（近代以降の「霞堤」）などの災害甘受的・環境共生的な技術およびそれをささえる耕地管理技術の背景にあるものとして論じられてきたが、研究史的には、社会経済史的な観点から村落社会における様々な共同組織との関連で分析され、論じられることはほとんどなかった。

さらに日本最長の河川である信濃川の治水に関する研究は、上記大熊孝のデッサンの作業（2004年、2007年）を除けば、建設省北陸地方建設局編『信濃川百年史』（1979年）の土木技術史観にたった河川治水史、高崎哲郎『天、一切ヲ流ス』（2001年）や信濃毎日新聞社出版局編・国土交通省千曲川川事事務所協力『寛保2年の千曲川大洪水「戌の満水」を歩く』（2002年）といったトピカルな災害史の取り組みがあるだけで、上記の災害甘受型防災機構について村落史料に依拠した社会経済史的分析を試みようとした研究は存在していなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、そのような研究史的背景にもとづいて、日本最長の河川である信濃川とその支流の沿岸地域社会を対象に、近世期における治水（河川管理）と水害対処に見られた災害甘受型ないし自然共生型の防災機構の実態を社会経済史的分析によって明らかにしようとするところにあつた。

その際、これまで信濃川上流域における村落社会の共同性に関するモノグラフィックな総合的調査研究を蓄積してきた視点から、洪水災害や治水に対する村落社会の対応システムや村落内外の防災組織の有り様について、信濃川の上流域、中流域、下流域それぞれの地域条件に即して歴史資料調査・実態調査を行い、近世的な地域的防災組織の特性や構造を明らかにしようとするところにあつた。本研究の主眼を置くことにした。

その際、以下のような諸点に留意した。すなわち、

(1) 従来土木技術的視点からなされてきた

河川管理史的研究では重視されてこなかった大河川沿岸地域の治水組織や治水事業について歴史学的な実証研究の方法に即して史料調査と分析を行うこと。

(2) 信濃川沿いの各地域において大河川のもたらす水害と災害に対する災害甘受型の防災手法が実際にはどのような防災技術や防災システムとして構築されていたのかという問題を地域的特性に注目しながら検討すること。

(3) それら河川管理・土木事業、および河川災害に対する防災機構の持つ「自然共生型」および「災害甘受型」といわれる時代的特性を、「近代」の視点から歴史学的に位置づけること。

以上である。これらの方法ないし視点が、他の諸研究と差別化する独創性であると考へたからである。本研究は、近世期の信濃川流域全域にわたる幕藩体制的な治水統治の構造、上流域・中流域・下流域それぞれの地域に固有の自然環境と結びついた共生経済生活構造、それらと結びついた治水防災機構を総合的に検討する一連の研究計画の出発点をなすものである。

3. 研究の方法

本研究では、研究目的に記した内容の研究を三年間の研究期間内に成し遂げるために、すでに行っていた予備的な調査ないし、課題を遂行するための予備的な検討に依拠して、信濃川上流の千曲川沿い地域として長野県上田市旧上塩尻村を、信濃川中流域の河川沿い地域として長野市旧今井村を、そして信濃川下流域の河川沿い地域として新潟県新潟市西蒲区旧中郷屋村に焦点をあて、そこから村落内外の地域的防災組織の実情を探らうと計画した。

これらの三つの村落に焦点をあてようと考えたのは、本研究以前に実施していた村落実態調査研究によって良質かつ多様で潤沢な村落史料の存在（調査時点で各地域での最良の残存歴史文書資料群）を確認することが出来たからである。

研究の方法は、上記3村に残された近世期を中心とする古文書史料群を対象として準備段階での作業によって集積した史料群への追加調査分も含め、調査および整理・撮影作業を行い、撮影したデジタル画像を利用しながらそれぞれを丹念に解読し、相互につきあわせながら分析していくというオーソドックスな歴史学的方法をとった。

研究内容に関わるものとして、全体的に以下のような方策とスキームに依拠しながら作業を行った。

(1) 信濃川とその支流沿岸の諸地域で発生した河川災害の内容の分析とDB化

(2) 自然共生的な地域経済を構成する地域的自然環境と産業条件の地域毎の分析とカテゴライズ

(3) 地域毎の治水および防災機構にかかわる検討資料の獲得(3つの村落史料の再調査ないし新調査)

3年間の研究期間を通じ、これらの作業を連年繰り返して実施してみるという作業計画を立てた。

4. 研究成果

結果として、3年間を通して、以下のような成果を出すことができた。

(1) 予定していた近世期治水関係の文書について、上塩尻村関連文書(藤本蚕種歴史館所蔵藤本家文書・佐藤嘉平治家文書、馬場4家文書、秋和村中島家文書)、長野市川中島今井村文書(長野市立博物館所蔵小林家文書、長野県立歴史館所蔵堀内家文書、個人所蔵堀内家文書)、新潟県旧西蒲原郡治水関係文書(中郷屋笛木家文書、新潟県立文書館所蔵伊藤家文書・笹川家文書その他治水関係文書)等の調査およびデジタル・カメラでのデジタル画像撮影を行うとともに、本研究で利用するデジタル・アーカイブを作成した。

(2) 上記資料を利用することによって、それぞれの地域について、以下のような特徴を明らかにすることが出来た。まず上流域の「千曲川」沿い地域(上田中心)であるが、その水災害構造の特徴は流水が急勾配の地形を流れるが故に相対的な急流水となり、多くの洪水は二～三日の短期に終息するパターンを取ることが多かった。そのような短期終息型の洪水によって惹起される水災害はけっしてダメージが小さかったわけではないが、その対応組織については、下流域の西蒲原郡における行政村落ないし村落同士の「村組」的な結合形態とは大きく異なり、水災害の当事者や治水上の利害関係者によって随時形成される村内外の家連合的な治水・防水組織が中心であったことが明らかとなった。このような性格の組織が一般的であったことは、治水と防水活動の中心が、築堤および堰普請等であったことと大きな関係があったものと考えられる。しかし、上田藩との関わりで水普請費用を上田藩から受け取る場合には、既存の行政村制度が利用された点は注目されるべきであろう。

(3) また、下流域の「信濃川」沿い地域(旧西蒲原郡の「三瀧」周辺における治水と水災害の構造的特徴が、長期にわたる湛水型の構造に対応するために行われる大規模な治水と排水土木事業を実施しうるような「村組」的組織であり、入り組み支配地域である

当地域においては複数の近世大名領と幕府領とにわたる広がりをもっていたことを明らかにすることが出来た。これらは、両地域共に水災害の抜本的な克服は明治以降の近代的土木技術の導入を待って初めて可能となり、それ以前においては、耕地利用において、上流地域における一定の水被害を前提とした耕地の優劣化と所有構造ないし被害を最小化する土地利用方式がとられ、また下流域においては水災害を前提とした固有の「割地」制度が実施されていた。これが、災害甘受型の社会構造の実装を為していたことが明らかとなった。

中流域の長野市近辺については、支流との関係および盆地の平坦地域においてしばしば洪水災害が生じていた歴史的事実は確認できたのであるが、収集撮影した文書史料群(小林家文書・堀井家文書)には、人口動態や村落内部の支配行政的な諸関係については明らかにされるが、結果的に治水・防水組織に関わる文書の残存が不十分であることがわかった。そのため、治水・防災に関連する文書史料の分析が適わず、上流と下流域ほどの明瞭な特徴を明らかにするところまではたどり着くことが出来なかった。収集した村落史料についてのさらなる文書調査について検討中である。

(4) 以上のような治水排水をめぐる信濃川上流域と下流域の治水防災組織の特徴を明らかにしえたことを前提として、次に、各地域における治水・防水の組織の村落内構造について、上田領下の上塩尻村の村落調査研究から導出した「村落的共同性の三層構造」を基準にしながら、同時代における村落的共生構造の実証研究を進めることが可能となったといえる。史料の整理分析作業に予想外に時間がかかってしまっており、研究期間内にはこれらの研究成果の多くは論文ないし専門書等として公表することが出来ないでいる。以後、順次学会ジャーナルへの投稿や内外の学会報告を通じて公にしていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 6件)

Hiroshi HASEBE, *The Historical Analysis of Durable Power to the Tenpo Famine; a case study of Kami Shiojiri Village*, the Rural History 2015 Conference in Girona during September, University of Girona, Spain, September 8th, 2015.

長谷部 弘「西蒲原地方における治水と防水の共同性」日本村落研究学会代62回大会、2014年11月1日、グリーンピアみやこ（岩手県・宮古市）

長谷部 弘「近世越後平野における治水と防水の支配・管理構造」社会経済史学会第83回全国大会、2014年5月25日、同志社大学（京都府・京都市）

Hiroshi HASEBE, *Governance System of Flood Control in Tokugawa Japan: as the case study of the human- nature coexisting system in Echigo plain*, International Rural History Conference, Bern Switzerland, August 21th, 2013.

Yoshiyuki MURAYAMA, *Geographical Setting of Nakagoya Village and Its Vicinity*, International Rural History Conference, Bern Switzerland, August 21th, 2013.

Futoshi YAMAUCHI, *Nature control and land use in flood areas:a case study of Nakagoya, Nishi-kanbara, Niigata, Japan*, International Rural History Conference, Bern Switzerland, August 21th, 2013.

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.econ.tohoku.ac.jp/~hhasebe/publication/index.html> 市場経済と共同性研究会 HP

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷部 弘 (HASEBE, Hiroshi)
東北大学・大学院経済学研究科・教授
研究者番号：50164835

(3) 連携研究者

吉原 直樹 (Yoshihara, Naoki)
大妻女子大学・社会情報学部・教授
研究者番号：40240345

村山 良之 (MURAYAMA, Yoshiyuki)
山形大学・教育実践研究科・教授
研究者番号：10210072

山内 太 (YAMAUCHI, Futoshi)
京都産業大学・経済学部・教授
研究者番号：70271856